ソリ（音）に思いを込めて

韓国の伝統芸能パンソリを継承する在日コリアン３世の女性。
彼女の生み出す「音」には日本人、韓国人、そして在日コリアンをつなぐ「場」を作り出す力がある。

パンソリの登場人物になりきる安聖民

高正子（コオ チョンジャ）
神戸大学非常勤講師

韓国の伝統芸パンソリとは

「音」を韓国語でいうと「음（ウム）」と「소리（ソリ）」のふたつがある。「ウム」は漢字の読みで、「ソリ」は固有のことばである。ソリには音のほかに声という意味があるが、この声の芸能が韓国にはある。一人の歌い手が太鼓の伴奏、鼓手（コス）に合わせ、語り（アニリ）と節のある歌（ソリ）、身振り（パルリム）によって物語を紡ぎだす芸能で、パンソリという。パンとは場・幕などの意味があり、パンソリが演じられる形態をいう。韓国では国の重要無形文化財に認定され、伝統芸能として伝承されている。一八世紀末にその原形が完成したといわれるパンソリは、祭りや市が立つ日に村の広場で、綱渡り（パンチュル）や民俗楽器の演奏、民謡や踊りなどとともに演じられる大道芸のひとつであった。ヨーロッパの吟遊詩人のように全国を巡りながら、つらく苦しい生活を強いられている人びとを慰め、癒してきた。人びとはパンソリの物語のなかに自分を重ね、泣いたり笑ったりすることで心を解放した。このような韓国の伝統芸能を継承としている在日コリアン三世がいる。彼女の名は安聖民（アンソンミン）。ここでは、安聖民の活動を紹介することで、ソリが人の人生にどのように影響し、そして、人と人をどのようにつないでいるのかを考えてみたい。

パンソリとの出会い

安聖民がパンソリに魅せられたのは大学生のころだ。きっかけは大学の先輩に誘われ学び始めた韓国語。教えてくれた在日二世の彼女は大阪、在日集住地で「生野民族文化祭」を中心とした民族文化活動の担い手の一人だった。自然とその活動に参加し、そのなかで民族楽器や民謡を知った。初めて聞いたはずのその「音」がどこか懐かしい。そう、それは幼いときに母（オモニ）が台所で一人歌う朝鮮民謡のあの「音」。原点はそこにあった。安聖民が参加した〝民族文化牌・マダン〟（一九八三年結成、前身は〝マダン劇の会〟）は在日二世・三世たちが民族文化を学ぶ場として作られたグループで、公立の小・中・高校で民族楽器の演奏や民話の演劇を通して伝統文化の紹介や在日としての生きざま・思いを伝える学校公演を中心的な活動としていた。楽器のリズム、民謡の調べ、そして自分のことを語る在日の言葉……それらの「音」が子どもたちに響き、その場にいた人と人をつなぐ……。〝マダン〟の活動にのめり込んだ安聖民はパンソリを学ぶための留学を決意する。

公立小学校の民族学級講師の職を辞し、パンソリの本場全羅南道・光州（クァンジュ）へ渡り、基礎をみっちり教わった。その後、ソウルで伝統音楽の理論を学ぶべく大学院へ。現在の師匠、パンソリ「水宮歌」の国家重要無形文化財技能保有者・南海星（ナムヘソン）先生に師事することになる。毎年、夏になると全羅北道・南原（ナムオン）の山に籠って修業をするレッスン合宿（サンコンブ）は今年で一五回目になる。「どうして日本人なのにパンソリを習うの？」。姉妹弟子たちに尋ねられ、安聖民は答える。「わたしは日本で生まれた韓国人なのよ。わたしたちはね……」。彼女たちは安聖民の語る「音」から在日コリアンを感知する。

南原でのレッスン風景

在日の思いをソリに込めて

パンソリはもともと広場で楽しむ大道芸で、人びとは歌い手が語る話に一喜一憂し、物語はその場でどんどん創られていく。安聖民が日本で活動する理由がここにある。自分の生まれ故郷である大阪で、ともに暮らす人びとに自分の話を「音」として伝える。パンソリが語られる場が一体となってつながっていく。そのために日本語の字幕を入れ、ときには日本語の歌詞を入れ、共感・共有できる時間を増やす。昨年七月二〇日に民博での研究公演「アリラン峠を越えていく――在日コリアンの音楽の今」でも、彼女の「音」は多くの人に受け入れられ、好評を博した。また、昨今は日本の語り芸である浪曲とのコラボなど、さまざまな試みを通して芸の幅を広げようとしている。

彼女の願いはパンソリを創作することである。在日コリアン三世である彼女の思いを込めたパンソリを聞く日もそう遠くはないだろう。

「アリラン」を競演する出演者たち（2014年7月20日、みんぱくでの研究公演）